学校教育実践コース（社会科教育専修），外国史Ｖ

講義形式授業科目の DP 対応に向けての諸課題

社会科教育専修・矢澤知行

１．授業の概要

「外国史Ｖ」は，学校教育実践コース（社会科教育専修）および総合人間形成課程・人間社会デザインコースの選択科目である。

本報告では，2012 年度前学期に実施した「外国史Ｖ」を実例としてとりあげ，講義形式の授業科目を到達目標やディプロマ・ポリシー（以下，DP）といかに対応させながら実践するかという課題について，授業実践上留意した点や授業評価の結果などをもとに述べていきたい。

まず，本授業の今期の受講生数は計 22 名であり，学年別の内訳は，３年生 21 名，４年生１名であった。また，所属別の内訳は，社会科教育専修 9 名，その他の専修 2 名，人間社会デザインコース 11 名であった。

授業の内容としては，モンゴルを中心とした中央ユーラシアの歴史について，ユーラシア諸地域を結合させた意義を検討しながら論じた。授業の冒頭ではモンゴル遊牧民の生活文化について解説し，その後，遊牧国家の誕生，中華世界・西アジア・ヨーロッパとの関わり，モンゴル時代の戦争と平和などについて論じた。授業の終盤では，ポスト・モンゴル時代から現代世界に至るまでの世界史の系譜を通観したうえで，私たちの生きている現代世界が歴史上どのような位置づけにあるのかという点について，現代世界をめぐる様々な問題を例示しながら論じた。

次に，授業目的としては，次の３点を掲げた。①従来の農耕文明的な史観を乗り越え，遊牧民を中心とする多様な中央ユーラシア生活民の立場から，世界史をとらえ直す。②新たな世界史観の獲得を通じて，私たちをとりまく現代世界の枠組みを根底から見つめなおすことをめざす。③中学校社会科歴史的分野の「東アジアとのかかわり」や高等学校世界史 A・B の「自然環境と歴史，世界の一体化，内陸アジア世界，諸地域世界の交流と再編，内陸アジアの動向と諸地域世界」などに関連する内容を中心に，中等教育で扱われる歴史学領域の基礎を学ぶ。

さらに，授業の到達目標としては，次の３点を掲げた。①遊牧民の歴史の特質について知識と理解を深め，説明することができる。（知識・理解・表現）②中学校や高等学校で学ぶ中央ユーラシア史（内陸アジア史）の領域のうち，モンゴルを中心とした遊牧民の歴史や地理に関する具体的な事象について知識と理解を深め，説明することができる。（知識・理解・表現）③遊牧民の歴史を世界史の文脈に接続させて考えることができる。（思考）

本報告に直接関わる DP については，次の通りシラバスに記載した。「教育に関する確かな知識と，得意とする分野の専門的知識を修得している。（知識・理解）」

２．アンケートの実施と質問項目

本報告を作成するにあたり，教育学部教育コーディネーター会議によって提供されている「DP による授業評価」のアンケート結果を参考にした。全 15 回の授業の最終回にあたる 2012 年 7 月 27 日にアンケート用紙を配布・回収した。

アンケートの質問は下記の 10 項目から成り，各項目について４段階（十分貢献した／貢献した／あまり貢献しなかった／授業の目標内容がこの DP とは無関係であった）の評価を記してもらった。

質問項目

①教育に関する知識の習得
②得意分野の専門的知識の習得
③教育をめぐるさまざまな現代的課題の理解
④それへの適切な対応策のあり方についての思考力・判断力の習得
⑤教育活動に必要な高い技能の習得
⑥教育活動に必要な豊かな表現力の習得

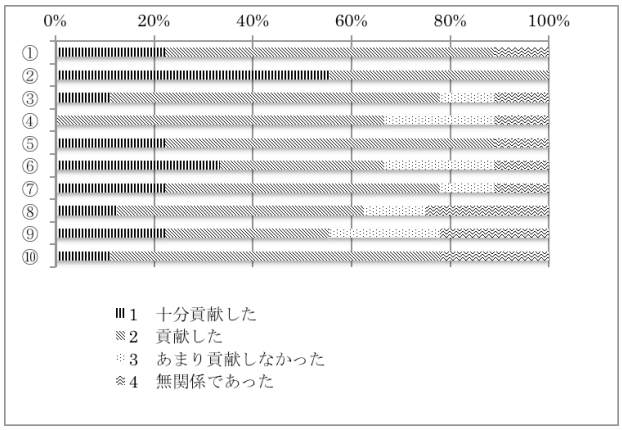
⑦自己の学習課題の明確化
⑧理論と実践を結びつけた主体的な学習への意欲の喚起
⑨専門的職業人としての使命感や責任感の形成
⑩多世代にわたる対人関係力の育成

なお，これらの 10 項目は，知識・理解（①②），思考・判断（③④），技能・表現（⑤⑥），関心・意欲（⑦⑧），態度（⑨⑩）の 5 つの要素に分類されている。

３．アンケートの結果

アンケート用紙は受講生のうち当日出席者全員に配布し，9件の有効回答を得ることができた。アンケート結果を整理したのが次のグラフである。

「外国史Ｖ」　アンケート結果



４．反省点と今後の課題

アンケートを通じていくつかの反省点を見出すことができた。

まず，本授業の主眼でもあり，DP との関連性の強い知識・理解の側面について述べる。アンケート項目②の専門的知識の習得については，おおむね良好な結果が得られたものの，①教育に関する知識については，必ずしも高い評価が得られなかった。このことは，本授業が，学生にとっては専門的知識の習得に偏っており，教育（とりわけ歴史教育）の領域への接続が十分でなかったことを意味している。

次に，③④教育をめぐる現代的課題や⑨⑩専門的職業人としての使命感・責任感に関する項目については，講義の終盤で，それらの点を意識した情報提供や問題提起を行ったにもかかわらず，芳しい評価を得ることができなかった。振り返って見ると，たしかに現代社会をめぐる国際的な問題には多くの時間を割いて言及したが（「外国史」の授業であるゆえ），それらの問題がじつは私たちにとって身近な教育をめぐる問題などと通底していることをもっと丁寧に説明すべきであった。

また，⑤⑥教育活動に必要な技能や表現力の習得については，本講義は全体を通じて対話や討論などを採り入れない講義形式の授業だったため，ほとんど意識していなかったが，一部の受講生から一定の評価を受けた。これは，授業に際して，視聴覚教材や配布プリントに工夫を凝らしたことが参考になったものと推察される。

今後の課題としては，上述の反省諸点をふまえながら，講義形式の授業は基本的に維持しつつも，アンケート項目①③④⑦⑧⑨⑩に関わる授業コンテンツを充実させていくことを第一に挙げたい。受講生にとって，いま学んでいることがカリキュラムの中でどのような位置を占めており，それが DP とどのような関係にあるのかを意識することは基本的な要件といえる。そうした見取図を授業の冒頭ではっきりと示すことができるよう次回から工夫をしてみたい。

また，歴史分野の他の授業科目（外国史Ⅰ～Ⅳ，Ⅵ，日本史Ⅰ～Ⅲ，社会科（地理歴史科）教育法など）との関係についても，担当教員の間で情報交換をしながら整理していく余地がありそうだ。もしも歴史分野の授業全体の到達目標や DP を設けることができれば，受講生にとって資するところ大であろう。